

## 論文

## 知的障害児における社会生活能力の評価について 1

## — 社会生活能力目安表による評価の意義と妥当性について —

柴田 長生

## 1 はじめに ～問題の所在～

知的障害は新しい概念ではない。恐らく古代より人類が承知してきた事柄だと思われるし、昔からどこにでも広く見かける障害像であっただろう。しかし、その定義や実態の把握などについては、今日に至るまで曖昧なままである。文献的には、精神疾患の記述は当時としては世界最高水準と評価されている（鈴木, 2013）、江戸中期の漢方医香川修庵の「一本堂行余医言（いっぽんどうこうよいげん）巻5」に、「癡騃（ちがいがい）」（注：痴騃（ちがいがい）と同意語）という記述があるが、多くの場合には、何らかの労働が可能な人間として社会の中に混在していたのかも知れない。

知的障害が鑑別対象として扱われたのは、1905年のピネーによる「知能検査」の公表からであろう。しかしその目的はサービス・就労や教育などの可能性を識別するためであり、その後の知的障害の定義区分には、知能検査の結果に基づいて、「白痴（はくち）」（重度：保護対象）「痴愚（ちぐ）」（中度：就労可能）「魯鈍（ろどん）」（軽度：教育可能）などと分類することが用いられ、長らく「精神薄弱」と称されてきた（特殊教育事典編集委員会, 1968）。

現在では、医学的診断分類上の定義として「DSM-IV-TR」（米国精神医学会, 2000）「ICD-10」（世界保健機構, 1993）による「精神遅滞」という概念が用いられる（注：2013年

にDSM-5が公表されたが、この件については後述する）。また、AAMR（米国精神遅滞協会）による障害定義の取り組みが1959年から開始され、2005年には協会の名称をAAIDD（米国知的・発達障害協会）と変更し、2010年に最新の定義（11版、以下11版と略す）を公表している。

AAIDDは、一貫して「低知能・低適応行動・発達期での発現」という3要件で知的障害を定義してきた。これは知的障害の概念形成における知能指数（以下、IQと略す）値への過度な依存を回避し、「欠陥モデルからサポートモデル」への転換という点で画期的であった（清水, 2009）。この方向は、障害概念の変革であるWHOによる1980年の「国際障害分類（ICIDH）」、2001年の「国際生活機能分類（ICF）」の流れとも呼応する方向であろう。

しかし、現在のもう一つの潮流として、多様な障害像の理解とその支援のために、鑑別分類や治療・教育手法などがますます細分化してきている。知的障害の周辺で「（高機能）広汎性発達障害」「アスペルガー症候群」「注意欠陥多動性障害」「学習障害」などの新たな概念が定着し、従来から存在する知的障害との間でかなり混乱した状況を呈し始めてきている。清水（2009）は「知的障害児はいかに理解され概念化されてきたか」という論文の中で、知的障害の概念形成に関する議論において、AAMRの継続的な検討にもかかわらず未だに適応行動概

念の曖昧さが解決できないまま残されているので、知能と適応行動の関係が今後も論点となることを指摘し、知的障害の概念形成における課題としてIQ値への過度な依存や、「軽度」者における様々な障害要因の混在について検討し、「軽度」者の中には別の障害カテゴリーでの識別の方が理にかなない、あえて「知的障害」と括る必要がない場合も存在するのではないかと指摘している。そして結論として、「(AAMRの定義に対する批判と議論の) 焦点は適応行動であり「軽度者」である」と述べているが、知的障害周辺におけるこのような潮流を包含するための「知的障害の脱構築」をも視野に入れる必要があるという指摘である。

知的障害を含む発達障害を広義の「発達障害」として再構成するような流れの中で、今話題になっている発達障害の障害特性をあまり示さない多くの知的障害に対する定義や評価はどのようなのであろうか。最近公表されたDSM-5(2013)において、「神経発達障害(Neurodevelopmental Disorders)」という大項目の下に、「知的障害(知的発達障害)(Intellectual Disability)(Intellectual Developmental Disorder)」「自閉症スペクトラム障害(Autism Spectrum Disorder)」という包括的な下位項目表記が新たに登場し、またAAMRがAAIDDに名称変更されたのも、現在の潮流をよく示している。しかし、概念表記や名称の刷新のみでなく、清水が指摘しているような諸課題への検討が継続されなければならない。

筆者はこれまで、知的障害児・者の福祉手帳である療育手帳の評価基準に対する検討をおこなってきた(柴田, 2004: 2004: 2005)。そして、その際の議論の主な焦点は、「IQ値の上限設定」「IQ値と社会生活能力(適応行動)のクロス評価」「社会生活能力(適応行動)の評価方法と評価基準」の3点であった。特に適応行動の評

価が知的障害の定義要件として明確に定義され(AAIDD定義)、知的障害の概念定義の議論における大きなポイントにもなっているのに、現実的には有効な適応行動に関する評価尺度がほとんど存在しないのは大きな欠陥かつ矛盾である(名越, 2009)。現実がこのような状況であるために、独自の評価尺度の作成と検討を続けており(柴田, 2004: 2005: 2006: 2013)、作成した評価尺度は現在一部の公的判定機関で活用されている。

## 2 目的と方法

### a 目的

本研究の全体的な目的は、知的障害児の適応行動評価のために作成した、「社会生活目安表(以下、「目安表」と略す)」による知的障害児の評価の意義と妥当性に関する検討である。本稿の記述の流れに従い、3つの具体的な研究目的を以下に示す。

第1の目的は、作成した「目安表」がAAIDDの11版の定義と評価主旨に合致しているかどうかについての検討である。11版では、「知的障害は、知的機能と適応行動(概念的、社会的および実用的な適応スキルによって表される)の双方の明らかな制約によって特徴づけられる能力障害である。この能力障害は、18歳までに生じる」とされている。

また11版における適応行動のアセスメントについては、「…適応行動の明らかな制約は、これらの標準化した尺度によって、(a) 適応行動の3つの型(概念的、社会的、又は実用的)のひとつ、あるいは(b) 概念的、社会的および実用的スキルの標準化した尺度による総合得点で、平均より約2標準偏差以上低い能力として、操作的に定義される。なお、得点を解釈する時は、アセスメント法の標準測定誤差を考慮

しなければならない」とされている。

第2の目的は、知的障害児の評価に際して、「目安表」は何を評価しているのかについての検討である。現在「目安表」は、京都府児童相談所その他で療育手帳の判定のために活用されている。そして評価基準の妥当性と「目安表」を用いた評価の妥当性を検討するために、2012年4月～9月の京都府児童相談所における療育手帳判定結果の検討を行った。療育手帳は2年更新で判定されるので、ここでの検討数は京都市を除く京都府内の知的障害児の約1/4に相当する。

第3の目的は、「知的能力」の評価と「適応行動（社会生活能力）」の評価は、異なる質的側面を有するのではないかという点に関する検討である。後に述べるように、全体的には「目安表」の評価結果は、IQ・DQ（発達指数。以下、DQと略す）の評価結果と相関する。しかし個別結果に着目すると、「目安表」の評価結果を表し、IQ・DQと同じく知的障害から有意

な制限を与えられる社会生活能力指数（以下、SQと略す）の程度が、IQ・DQの程度とかなり異なる場合が少なくなく、IQ・DQに比べてSQの方が高い場合も低い場合も共に認められた。IQ・DQの結果とSQの結果とを相対的に比較検討し、「知的能力」「適応行動」の発達の質の違いに関する考察を試みる。更に、知的障害を評価する際に「適応能力」を評価することの意味についても言及したい。

## b 方法

### ① 調査対象

2012年4月～9月に、京都府児童相談所（京都府家庭支援総合センター・京都府宇治児童相談所・京都府福知山児童相談所）において実施された療育手帳判定全数（447件）の内、身体障害を伴う者34件、非該当となった者29件を除く384件の判定結果について検討した。調査対象の詳細は表1のとおりである。

表1 調査対象の詳細

年齢区分	全障害	最重度	重度	中度	軽度	男	女
0:0 ～ 5:11	70	3	9	30	28	51	19
6:0 ～ 11:11	135	16	23	30	66	91	44
12:0 ～	179	21	24	47	87	115	64
合計	384	40	56	107	181	257	127

### ② 評価尺度としての「目安表」

表2に示した「目安表」は、心理・保育・教育の現場ベテラン実務者による評価課題の蒐集・検討を経て作成され、健常児345名の評価結果に基づいて標準化を行い、信頼性・妥当性の検討も行った（柴田, 2006: 2013）。本稿で報告する「目安表」の $\alpha$ 係数の詳細と標準測定誤差については、上記の健常児データから算出している。また、知的障害児の評価結果との比較も、この健常児データを引用している。

### ③ 評価者と評価方法

知的能力の評価については原則として新版K式発達検査2001を用いて臨床心理士が行った（評価にはDQを用いた）。個別検査が実施できない子どもの評価は遠城寺式乳幼児分析的発達検査を用いて知的能力を推定した。原則としてDQ76以上の子どもは知的障害と認定しなかった。

適応能力の評価については、ソーシャルワーカーが「目安表」を用い、保護者への聞き取り

表2 社会生活能力目安表

年齢(歳 月) 性別(男・女)		記入法:できる(恐らくできるだろう)と思われる項目に、大きな○をつけてください				
年齢区分	身辺自立	移動	作業	意志交換	集団参加	自己統御
0:6	与えられると、スプーンから飲む	ハイハイや寝返りなどで目的の方向に移動しようとする	持たせたガラガラや鈴などのおもちゃを繰り返して遊ぶ	人に向かって声を出す	人から働きかけられると自分からも嬉しそうに反応する	人の声で気分が静まる
1:0	コップ(は乳瓶)を両手で持って飲む	近くの目標に向かって歩こうとする	小さな物を指でつまむ	バイバイされると反応する(何らかの身振りでの応答をする)	拍手などの身振りをまねる	禁止された時に動きを止める
1:6	着衣させるときに協力的な動作をする(パンツをはかせる時に脚をひろげるなど)	外出したときに、大人と手をつないでいっしょに歩く	なぐり描きをしたり、直線などをまねて描こうとする	単語がいくつか言える	体操をまねて、リズムに合わせて、手・足・体を動かす	簡単な指示に従う(ボイしてきてなど)
2:0	スプーンやフォークですくったり突き刺したりしてひとりで食べる	ひとりで長い距離を歩く	開けた扉やふたなどを元通りに閉めようとする	絵本などを見て、もの名前が言える	同じ年齢の子どもが集まっているのに関心を示し、近づこうとする	何でも自分でやりたがる
2:6	おしっこが出たことを自分から知らせる	ひとりで階段を上がり下りする(一段毎に両足揃えでの昇降でよい)	コップからコップへ、水を移し替えることができる	自分の名前が言える(名前を尋ねられると氏名を答える)	誘われると仲間に入る	「後で」などと言われると待つことができる
3:0	靴をひとりではく	歩道などからはみ出さずに、ひとりで歩く	はさみでちよきちよきと紙を切る(形にならなくてもよい)	数種類の二語文を話せる	クラス集団の中で、皆と一緒に歌が歌える	自分の物と他人の物を区別する(家族以外の他者との間でも)
3:6	ボタンのある服の脱着をひとりでする	ゴールまで走ることができる	顔など、形のあるものを描くことができはじめる	自分が使いたい物を友達が使っている時に「かして」という	ままごとなどのごっこ遊びで役を演じる	促されれば、簡単な「きまり」を守ることができる
4:0	自分で歯を磨き、口をすすごうとする	階段を2~3段飛び降りることができる	箸で食べ物を、何とかがつまむことができる	「それは、どうしてなの?」「それからどうなるの?」といった質問ができる	運動会などで、リズムに合わせて、皆と一緒に遊戯や踊りなどができる	欲しいものがあっても、説得されれば我慢できる
4:6	食卓で、ほとんど大人の世話なしで食べることができる	根っこなどの障害物があっても、転ばずに歩いたり走ったりできる	はさみで、簡単な形を切り抜くことができる	電話で、簡単な会話を続けることができる	ブランコなどの順番を、自発的に待つことができる	禁止されていることを他の子がやった時、その子を注意する
5:0	大便の始末をひとりで、紙でお尻を拭くことができる	車や自転車に気をつけ、ひとりで道を歩くことができる	簡単な折り紙で、何かを作ることができる(紙飛行機など)	自分が経験したことを大人や友達に自分から伝え、会話を楽しむ	じゃんけんや勝ち負けがわかる	大勢の人の中や乗り物の中でダダをこねたりしない
5:6	自分で洋服の脱着をし、脱いだ服をきちんとたたむことができる	信号を守って、道を安全に渡ることができる	粘土で人や動物などを作る	自分の名前など、簡単な文字を読むことができる	劇で、簡単なせりふを演じることができる	夜、自分の部屋でひとりで寝ることができる
6:0	お風呂で、自分で体を洗い、タオルで自分の体を拭く	近くの店であれば、簡単なお買いに行くことができる	お菓子やおはじきなどを、5つづつ数えて袋詰めにすることができる	経験した場面を絵で描き、尋ねれば描いた内容を説明することができる	ドッジボールや鬼ごっこなどの集団遊びに、ルールを理解して参加することができる	1時間ぐらいなら、独りで留守番できる
7:0	ひとりで時間割をだいたいあわせることができる	ひとりで学校へ行って、帰ってくることができる	定規を使って、直線や図形を描くことができる	日常の出来事を短い文章で書くことができる(日記や作文)	トランプ、カルタ、すごろくなどの簡単なゲームで、ルールを守り、友達と仲良く遊ぶことができる	促されれば、相手の話を静かに聞くことができる
8:0	簡単な家事のお手伝いができ、簡単な調理器具が扱える	友達の家などを自転車や徒歩で自由に行き来できる	適量ののりを使って、同じ大きさの紙を張り合わせる(箱に千代紙を貼るなど)	簡単な手紙を書くことができ、宛名を書いて送ることができる	友達と遊ぶ楽しさが分かり、自分たちで約束して遊べる	大人の指示に従い、公共施設では静かにしようとする
9:0	お小遣いから、必要な物(文房具など)をひとりで買いに行ける	知っているところなら、交通機関を使って行くことができる	コンパスで円が描け、カッターナイフを安全に使うことができる	自分の伝えたいこと、中心が相手に伝わるように、筋道を立てて話すことができる	ルールのある集団遊びを理解し、グループでの話し合いに従って行動することができる	注意されなくても、人の話や説明を終わるまで静かに聞くことができる
10:0	暑さや寒さや、その日の活動内容にあわせて衣服の調節ができる	かなり遠いところでも自転車に乗って行くことができ、初めての場所でも教えられたとおりに行くことができる	ナイフ、彫刻刀などの刃物を注意して安全に使うことができる	人に応じて言葉が使い分けられる	野球やサッカーなどを、ルールを守り、友達と協力して楽しくできる(クラブ活動など)	相手の立場を考えて譲り、友達の言い分を受け入れることができる
11:0	自分の部屋の整頓や、自分の衣服の整理ができる	目的地までの時刻や料金を調べ、バスや電車で行くことができる	電卓を自由に使いこなせる(かけ算やわり算も)	電話などで、要件をメモして、人に伝えることができる	年齢の異なった子ども集団のリーダーとして、年少児をまとめることができる(お世話ができる)	発熱時に自ら体温を測り、入浴を控えたり、安静にしようとするなど、病気になるまいよう自分でコントロールすることができる
12:0	自分の容姿に気を配り、場所や時にふさわしい服装をする	他府県の親戚の家に、ひとりで出かけることができる	包丁を使って、ジャガイモなどの皮がむけ、さいの目に切ることができる	複数の他者の意見を聞いて考え、自分の意見を伝えることができる	友人と一緒に外出計画を立て、複数の目的地を交通機関を適切に利用して共に行動できる	自分で目標を設定し、達成に向けて計画的に努力できる



面接に基づいて行った。総合社会生活能力指数を用いて障害程度の判定を行ったが、「身辺自立」「移動」「作業」「意志交換」「集団参加」「自己統御」の6つの下位領域についてもそれぞれ能力指数計算を行った。このほかに要配慮事項を聴取し、総合的に障害程度判定を実施した。

#### ④ データ集計と統計処理

データ集計については Microsoft Access 2010 を用い、統計処理についてはエクセル統計 2010 を用いて行った。

#### ⑤ 個人情報の取り扱いについて

本調査に当たっては、個人を識別できる情報は取り扱わないこととし、調査結果を相談業務に還元するという条件に京都府児童相談所との間で協約を締結して実施した。

### 3 結果と考察

集約・検討内容が多岐にわたるので、検討内容毎に結果を提示し、それへの考察を順次行いたい。

#### a 11版定義との照合と、社会生活能力を評価することの意義

AAIDD の定義に基づく知的障害のアセスメントにおいて、「目安表」の使用が妥当であることを検討するために、先に行った信頼性・妥当性の検討内容に加えて（柴田, 2006, 2013）、健常児による「目安表」標準化データを用いて  $\alpha$  係数を詳細に算出し、その数値を元に標準測定誤差（SEM）を計算した。その結果をまとめたのが表3である。なお、標準測定誤差の計算には、次の公式を用いている。

$$\text{標準測定誤差 (SEM)} = \text{標準偏差} \times \sqrt{1 - \text{信頼性係数 (}\alpha\text{係数)}}$$

#### 〈考察〉

AAIDD の11版によれば、適応行動評価のための尺度としては、①概念的・社会的・実用的スキルを総合的に評価できる標準化された尺度、②「通常の社会適応行動の実行能力を評価する尺度、③評価される人と同一の年齢群、同一の社会内で標準化された尺度、④標準測定誤差が明確に示された尺度、⑤ -2SD 以下でカットオフする操作的定義、という5つの内容がクリアされなければならないとしている。「目安表」は、21世紀の日本の子どもに対して標準化されており、現実的な子どもとしての生活を営むために「最低この内容を獲得してほしい」という行動項目を子どもの専門家の検討によって厳選し、80%の子どもが能力獲得できる年齢

を通過年齢として標準化されているので（柴田, 2006）、上記の②・③の基準は現時点ではクリアできたと考える。

また11版は、評価する際に「標準測定誤差を勘案する」ということを求めているが、表3に見られるように、信頼係数は全数・男女別・年齢区分別の各データにおいて十分な値を得ている。特に評価する際の最終指標として用いている「総合指数」については、 $\alpha$  係数は「0.900～0.984」の範囲にあり、十分な数値を得ている。標準偏差値は、各知能検査が有する標準偏差値に比べてやや小さい印象があるが、全データの総合指数の標準偏差は11.8であり、これにより十分な識別とカットオフポイントが提供できると思われる。

表3  $\alpha$ 係数と測定標準誤差 (SEM)

区分	N	指数項目	平均値	標準偏差	$\alpha$ 係数	SEM
全体	311	総合	103.6	11.6	0.984	1.49
		身辺自立	102.7	12.7	0.906	3.90
		移動	103.7	14.1	0.896	4.55
		作業	101.5	12.9	0.905	3.99
		意志交換	100.6	13.2	0.902	4.14
		集団参加	106.7	16.6	0.896	5.37
		自己統御	106.5	17.3	0.895	5.60
男	155	総合	101.5	12.0	0.984	1.53
		身辺自立	100.0	12.9	0.907	3.96
		移動	102.3	14.1	0.901	4.46
		作業	99.1	13.2	0.906	4.03
		意志交換	99.1	14.1	0.902	4.44
		集団参加	104.3	17.0	0.899	5.41
		自己統御	103.9	17.1	0.896	5.54
女	156	総合	105.8	10.9	0.983	1.41
		身辺自立	105.3	11.9	0.904	3.68
		移動	105.1	14.0	0.892	4.62
		作業	103.9	12.3	0.903	3.82
		意志交換	102.2	12.1	0.903	3.78
		集団参加	109.1	15.9	0.892	5.23
		自己統御	109.1	17.1	0.895	5.56
1-3	68	総合	107.5	14.8	0.948	3.39
		身辺自立	102.5	19.4	0.714	10.38
		移動	112.6	20.3	0.740	10.36
		作業	101.9	17.2	0.700	9.43
		意志交換	102.4	17.1	0.753	8.49
		集団参加	113.6	21.7	0.722	11.43
		自己統御	111.9	21.7	0.743	11.01
4-6	84	総合	108.8	8.8	0.902	2.77
		身辺自立	107.4	8.6	0.570	5.67
		移動	105.3	8.6	0.602	5.40
		作業	106.1	11.7	0.510	8.16
		意志交換	104.9	10.5	0.446	7.80
		集団参加	113.5	14.5	0.542	9.84
		自己統御	115.5	14.4	0.547	9.71
7-9	86	総合	102.3	7.1	0.928	1.92
		身辺自立	103.0	8.2	0.631	5.00
		移動	102.1	7.6	0.565	5.04
		作業	100.8	10.4	0.644	6.21
		意志交換	99.9	10.3	0.651	6.07
		集団参加	104.0	8.4	0.585	5.43
		自己統御	104.3	9.2	0.551	6.19
10-12	64	総合	94.3	8.7	0.900	2.76
		身辺自立	96.5	8.6	0.462	6.30
		移動	93.4	9.6	0.529	6.59
		作業	96.2	9.0	0.533	6.16
		意志交換	94.3	11.9	0.598	7.56
		集団参加	93.6	10.2	0.553	6.85
		自己統御	91.7	11.5	0.594	7.33

6つの下位領域については領域ごとに特徴があり、特に「集団参加」「自己統御」についてはばらつき幅が大きい。本稿では各領域に関する検討は行わないが、臨床場面での評価に資するために、また11版が求める基準④・⑤をクリアするために、表3のデータを公表しておきたい。

ここで問題になるのは、11版の基準①で「概念的・社会的・実用的スキルを総合的に評価できる標準化された尺度」ということを求めているにもかかわらず、そもそも適応行動、適応性スキルとは何なのかについての議論が定まっておらず、標準化された有用な評価尺度そのものが現実的にはほとんど存在しないという点である。清水（2009）は先に示した論文において、AAIDDの議論の中でも適応行動概念の曖昧さが解決できないまま残されていることを指摘しているが、その後示された11版の定義においてもこの問題は相変わらず継続しているように思われる。また清水（2009）は軽度障害の問題も言及し、この中に学習障害などの障害を持った者が混在し、「低知能」かつ「低適応行動」という基準でカットオフができない障害像が見られると述べている。学習障害以外の多様な発達障害の障害像を勘案すれば、またアセスメントの価値基準を「サポートモデル」にシフトするほど、適応行動に対する評価の重要性が高まるのであるが、逆に本来評価すべき「知的障害」の枠組みが曖昧になり（あるいは放置され）、各発達障害の特徴的な臨床像のみがクローズアップされ、よりベーシックな適応行動評価の位置づけが曖昧にされてしまうのではないだろうか。現在はある意味では発達障害の各論によりフォーカスされた時代であり、逆にベーシックな適応行動概念の議論やそれを評価するための方法の検討が曖昧なまま残ってしまっているのではないだろうか。

「目安表」の存在意義は、よりベーシックな

評価尺度であるということである。AAIDDの適応行動に関する定義と議論の経過において、1992年のAAMR第9版で示された定義は画期的であった。この時期は国際障害概念からICFへ向かう時期と重なっている点にも留意したい。適応スキルの内容を定義に具体的に列挙したのはこの第9版だけであり、「…適応スキルの領域とは、コミュニケーション、身辺処理、家庭生活、社会性のスキル、コミュニティ資源の利用、自己指南、健康と安全、実業的学業、余暇、労働である」と示されている。後の版では、定義に記された「概念的、社会的及び実用的スキル」についての具体的な項目が本文中に記載されている。用語としての「適応スキル」「適応行動」「社会生活能力」という表現はさておくとしても（このことも議論の対象となっている）、「目安表」に盛り込んだ6領域と各課題は、9版定義の記述内容に沿って、発達途上にある子どもにとっての評価枠の作成と評価項目の蒐集を行い得たと考えている。そして、その妥当性を健常児に行った標準化から得られる内容からだけではなく、評価対象である知的障害児に対して行った結果から、尺度の妥当性と、「目安表」を用いて評価することの意味を検証していかなければならない。

#### b 各領域・各課題ごとの通過の様子

健常児と知的障害児における「目安表」の各課題の通過率の推移を、6領域別に比較表示したのが図1～図12である。健常児データの通過率は、生活年齢による年齢区分ごとに表示されているが、知的障害児データの場合は、生活年齢による年齢区分ではなく、発達検査結果から導かれる精神年齢（発達年齢）による年齢区分ごとの通過率が表示されている。推移の様子がグラフィカルに分かるように、通過率20%から90%の場合は図を用いて表示している。

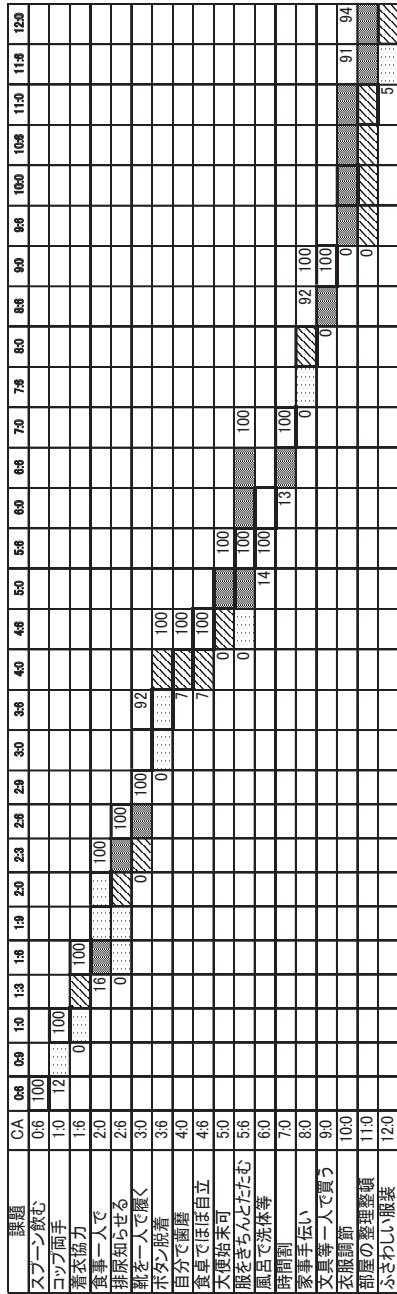


図1 健常児データによる身辺自立の通過の様子

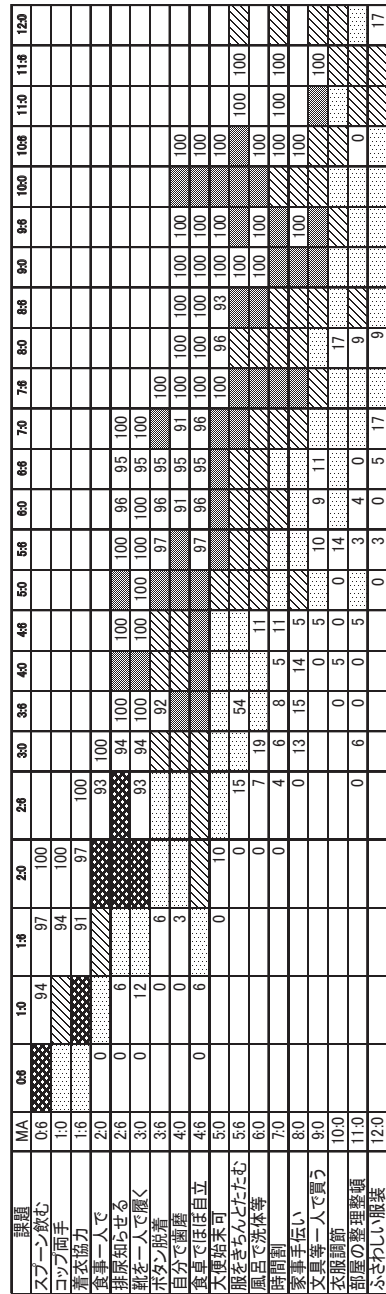


図2 知的障害児データによる身辺自立の通過の様子

通過率の凡例: 20%~50%未満 50%~75%未満 75%~90%



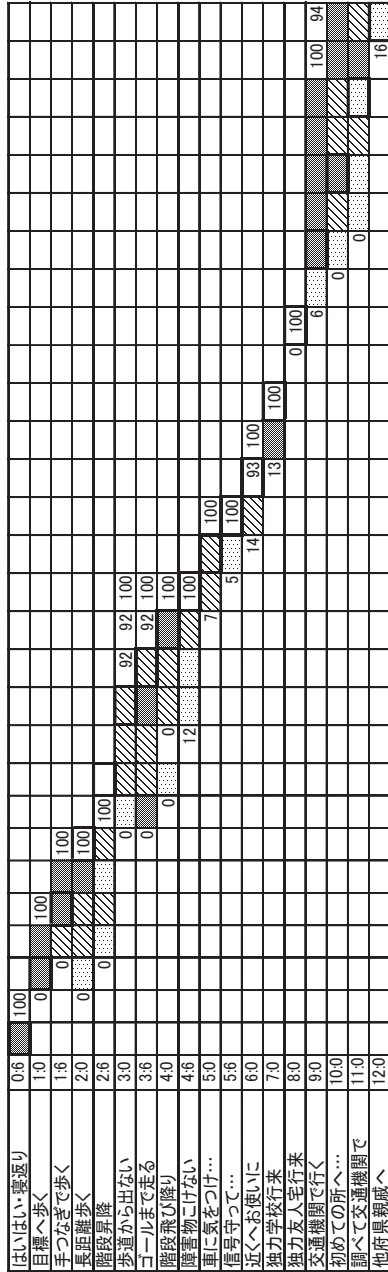


図3 健常児データによる移動の通過の様子

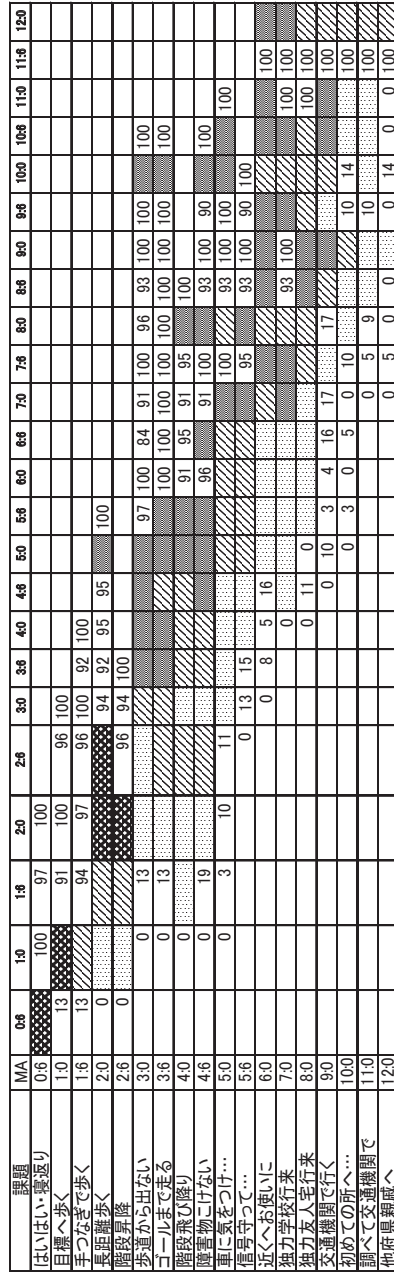


図4 知的障害児データによる移動の通過の様子

通過率図の凡例: 20%~50%未満 50%~75%未満 75%~90%



課題	CA	0:6	0:9	1:0	1:3	1:6	1:9	2:0	2:3	2:6	3:0	3:6	4:0	4:6	5:0	5:6	6:0	6:6	7:0	7:6	8:0	8:6	9:0	9:6	10:0	10:6	11:0	11:6	12:0
人へ発声	0:6	100																											
ハイハイへ反応	1:0	0	100																										
単語数語	1:6	0	100																										
絵本物の名前	2:0	0	100																										
姓名答える	2:6	0	100																										
二語文数種	3:0	0	100																										
「かして」といえる	3:6	0	100																										
「どうして」と質問	4:0	0	100																										
電話で会話	4:6	0	100																										
総論を話す	5:0	0	94	100																									
文字を読む	5:6	0	100																										
総論場面の描画	6:0	0	100																										
出来事を文意化	7:0	0	100																										
簡単な手紙宛先	8:0	0	100																										
筋道立てた説明	9:0	0	100																										
言葉の使い分け	10:0	0	100																										
電話で要件をメモ	11:0	0	100																										
自分の意見	12:0	0	100																										

図7 健常児データによる意志交換の通過の様子

課題	MA	0:6	1:0	1:6	2:0	2:6	3:0	3:6	4:0	4:6	5:0	5:6	6:0	6:6	7:0	7:6	8:0	8:6	9:0	9:6	10:0	10:6	11:0	11:6	12:0				
人へ発声	0:6	100																											
ハイハイへ反応	1:0	13	96	100	92	100																							
単語数語	1:6	0	97	100	96	100	96	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100
絵本物の名前	2:0	0	9	100	90	100	90	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100
姓名答える	2:6	0	0	100	95	100	90	100	96	95	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100
二語文数種	3:0	0	0	100	100	97	96	95	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100
「かして」といえる	3:6	0	16	100	91	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100
「どうして」と質問	4:0	0	11	13	100	93	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100
電話で会話	4:6	0	3	4	8	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100
総論を話す	5:0	0	4	13	0	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100
文字を読む	5:6	0	4	19	0	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100
総論場面の描画	6:0	0	0	19	0	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100
出来事を文意化	7:0	0	5	0	5	0	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100
簡単な手紙宛先	8:0	0	5	0	5	0	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100
筋道立てた説明	9:0	0	5	10	7	4	11	9	19	13	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100
言葉の使い分け	10:0	0	0	10	7	4	11	13	19	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100
電話で要件をメモ	11:0	0	0	5	4	10	4	7	10	14	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100
自分の意見	12:0	0	4	11	4	10	9	13	10	14	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100

図8 知的障害児データによる意志交換の通過の様子

通過率の凡例: 20%~50%未満 50%~75%未満 75%~80%

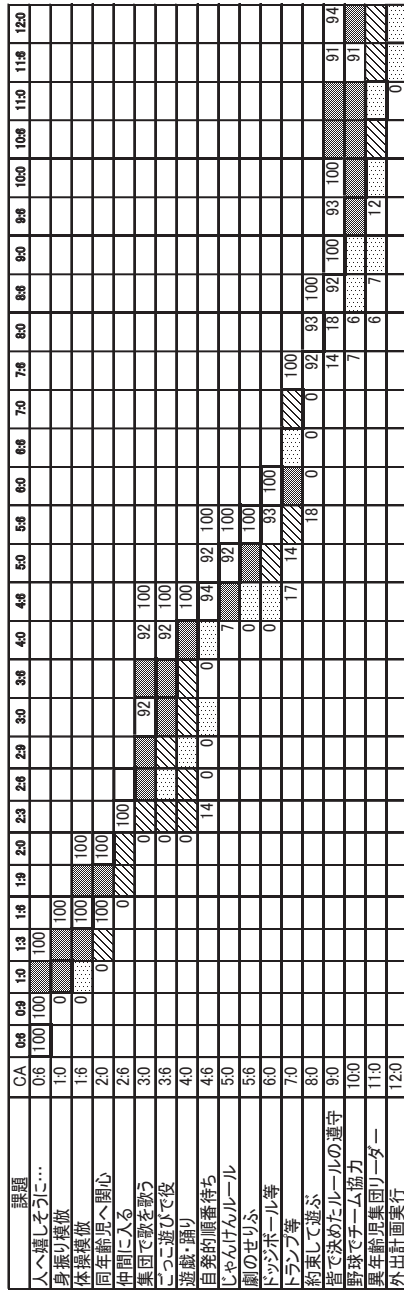


図9 健常児データによる集団参加の通過の様子

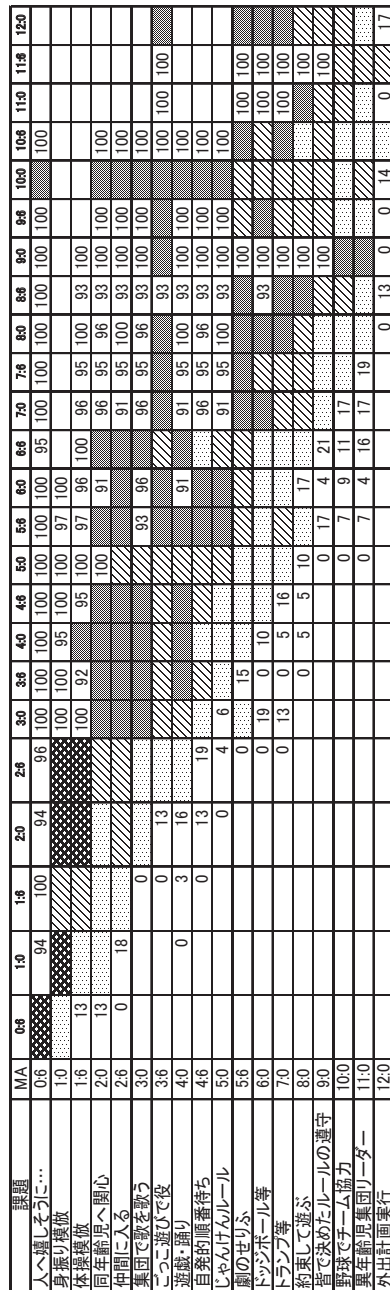


図10 知的障害児データによる集団参加の通過の様子

通過率の凡例: 20%~50%未満 (点線), 50%~75%未満 (斜線), 75%~90% (縦線)

課題	CA	0:6	0:9	1:0	1:3	1:6	1:9	2:0	2:3	2:6	2:9	3:0	3:6	4:0	4:6	5:0	5:6	6:0	6:6	7:0	7:6	8:0	8:6	9:0	9:6	10:0	10:6	11:0	11:6	12:0					
人の声で鎮静	0:6	100	100																																
禁止に動作停止	1:0	0	100																																
簡単な指示に従う	1:6	0		100																															
自分でやりたがる	2:0				16							100																							
1人で待つ	2:6					0					100																								
自他の物の区別	3:0					10	14	100																											
決まりを守る	3:6					0	0	100																											
説明されれば我慢	4:0					0	0																												
他児を注意	4:6																																		
大勢の中でタダこねない	5:0																100																		
夜自室で一人で寝る	5:6																93	100																	
留守番	6:0																14																		
相手の話を静かに聞く	7:0																					100													
公共施設で静粛	8:0																					0	92	100	92	100	93								
自発的に他者の話を聞く	9:0																					0	18	93											
相手の立場を考慮して譲る	10:0																					12													
酒時の自己コントロール	11:0																					0													
目標設定達成努力	12:0																					0													

図 1 1 健常児データによる自己統御の通過の様子

課題	MA	0:6	1:0	1:6	2:0	2:6	3:0	3:6	4:0	4:6	5:0	5:6	6:0	6:6	7:0	7:6	8:0	8:6	9:0	9:6	10:0	10:6	11:0	11:6	12:0	
人の声で鎮静	0:6			94	97	93	94	92	100	100	100	100	100	100	95	100	95	100	100	100	100	100	100	100	100	100
禁止に動作停止	1:0	0			100		94	92	100	100	100	100	100	100	96	95	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100
簡単な指示に従う	1:6	0				96																				
自分でやりたがる	2:0	0																								
1後で待つ	2:6	0		13											96	96	100	96	100	100	100	100	100	100	100	
自他の物の区別	3:0	0	6	13											96	96	100	96	100	100	100	100	100	100	100	
決まりを守る	3:6	0	6	6											96	96	100	96	100	100	100	100	100	100	100	
説明されれば我慢	4:0	0	6	6											96	96	100	96	100	100	100	100	100	100	100	
他児を注意	4:6	0	3	11											96	96	100	96	100	100	100	100	100	100	100	
大勢の中でタダこねない	5:0	0	6	7											96	96	100	96	100	100	100	100	100	100	100	
夜自室で一人で寝る	5:6	0	6	0	10	0	13								96	96	100	96	100	100	100	100	100	100	100	
留守番	6:0	0	3	0	3	0	13								96	96	100	96	100	100	100	100	100	100	100	
相手の話を静かに聞く	7:0	0	6	0	0	0	19								96	96	100	96	100	100	100	100	100	100	100	
公共施設で静粛	8:0	0	6	0	0	0	19								96	96	100	96	100	100	100	100	100	100	100	
自発的に他者の話を聞く	9:0	0	6	0	6	0	19								96	96	100	96	100	100	100	100	100	100	100	
相手の立場を考慮して譲る	10:0	0	6	0	0	0	6								96	96	100	96	100	100	100	100	100	100	100	
酒時の自己コントロール	11:0	0	5	0	5	0	3	9	11	17					96	96	100	96	100	100	100	100	100	100	100	
目標設定達成努力	12:0	0	0	0	0	0	10	3	4	0	10	3	4	0	9	19	4	13								

図 1 2 知的障害児データによる自己統御の通過の様子

通過率の凡例: 20%~50%未満 (点線), 50%~75%未満 (斜線), 75%~80% (縦線)



各図に表示した年齢区分は、3ヶ月ごとの区間の場合（健常児データの3:0までのデータ）には「表示月±1ヶ月」の年齢区分データの通過率、6ヶ月ごとの区間の場合（健常児の3:6以降と、知的障害児の全データ）には「表示月齢-2ヶ月から表示月齢+3ヶ月」の年齢区分データの通過率を表示している。

### 〈考察〉

健常児の場合は生活年齢の加齢に応じて通過課題の能力レベルが上昇し、知的障害児の場合は、後に述べるようにIQとSQに高い相関が見られることから、精神年齢の増加に伴って通過課題のレベルが上昇することが予測された。各図を見ると、健常児の場合も、知的障害児の場合も、大づかみに見るとそのような結果となっている。

しかし詳細に見てみると、健常児の場合は、8歳程度の課題まではかなりニアな通過レベルの増加が見られるのに対して、9歳程度の課題以降には、少し通過のばらつきが認められる。一方知的障害児の場合は、大づかみに見れば精神年齢の増加に伴って通過レベルの増加が見られるが、健常児に似たりニアな増加は最初の数個の課題（概ね2歳～3歳レベルの課題まで）に限られ、その後の課題の通過の様子には精神年齢に対する結構広い範囲にわたるばらつきを示している。

ばらつきの様子を大づかみに考察してみると、2歳～3歳レベルぐらいまでの課題については比較的ニアな増加が見られるのに対して、それ以降の課題ではばらつき幅が増しており、2歳～3歳レベル以降の課題獲得は必ずしも「知的能力」の増加によって一元的に推進される訳ではなさそうである。また健常児においてもばらつきが見られ始めた9歳以降の課題については、精神年齢が課題年齢に達した後も必

ずしも全てのケースに課題達成が見られるわけではないようである。

知的障害児における社会生活能力の獲得におけるこのような傾向は、知的障害が社会生活能力に及ぼす制約の特性なのか、養育環境や養育条件の影響のためなのか、知的障害全体の中に存在する発達障害を含む多様な障害特性のためなのか、知的障害児が通過しにくい「壁」のようなものが社会生活能力の発達段階の中に存在するのか、あるいは社会生活能力という領域そのものの持つ本来特性なのか、その分析は容易ではない。しかし、知的障害が与えるそれぞれの能力に対する制約の様子は、知的能力への影響と社会生活能力への影響とでは、明らかにその様子が異なる。

ここで示した各図は、個々の子どものアセスメントを行う際には参考になる。個々の子どもの社会生活能力の獲得状況の位置づけを見通すことができ、その子どもに実施した知的能力評価結果との相対的な観点から評価・判断できる。そこから今後の個別支援のテーマが見えてくるだろう。

### c 知的障害児におけるSQの評価結果と、IQとSQの関係の概括

「目安表」を用いて行った知的障害児における「社会生活能力」の評価結果をまとめたのが表4である。全件数と、最重度（IQ20以下）・重度（IQ21～35）・中度（IQ36～50）・軽度（IQ51～75）の4つの障害程度区分別に、各領域のSQの平均値と標準偏差を掲載している。

療育手帳判定結果における、知的障害児のIQと7種類のSQ（総合指数と6領域の各指数）、合計8種類の指数相互のスピアマン順位相関を、調査全数と3つの年齢区分ごとに算出し、全ての相関係数の検定結果をまとめたのが表5である。

表4 知的障害児の「目安表」評価結果

区分	N	指数項目	平均値	標準偏差
全体	384	IQ	46.7	17.2
		総合	46.1	18.5
		身辺自立	51.6	20.5
		移動	46.3	19.4
		作業	50.7	22.4
		意志交換	41.5	21.6
		集団参加	43.3	22.7
		自己統御	46.4	25.0
最重度	40	IQ	14.5	3.8
		総合	15.9	6.0
		身辺自立	20.8	8.4
		移動	19.7	9.2
		作業	18.4	10.1
		意志交換	10.6	7.1
		集団参加	13.8	9.9
		自己統御	14.3	9.2
重度	56	IQ	28.3	4.1
		総合	32.2	10.6
		身辺自立	39.0	14.2
		移動	34.2	11.5
		作業	35.4	11.8
		意志交換	26.3	14.1
		集団参加	27.1	16.1
		自己統御	35.3	19.4
中度	107	IQ	43.4	4.2
		総合	46.0	12.7
		身辺自立	53.7	16.6
		移動	45.3	16.4
		作業	50.1	18.2
		意志交換	40.9	16.4
		集団参加	42.8	16.3
		自己統御	49.1	20.7
軽度	181	IQ	61.5	7.1
		総合	57.0	14.5
		身辺自立	61.1	17.4
		移動	56.4	16.6
		作業	62.8	18.9
		意志交換	53.4	18.3
		集団参加	55.1	20.6
		自己統御	55.3	24.4

表5 各指数間のスピアマン順位相関

スピアマン順位相関 (全数)

	I Q	総合	身辺	移動	作業	意志	集団	統御
I Q		0.69	0.56	0.62	0.65	0.63	0.60	0.47
総合指数	**		0.83	0.82	0.82	0.83	0.86	0.82
身辺指数	**	**		0.71	0.70	0.64	0.64	0.62
移動指数	**	**	**		0.69	0.61	0.66	0.59
作業指数	**	**	**	**		0.62	0.64	0.59
意志指数	**	**	**	**	**		0.71	0.65
集団指数	**	**	**	**	**	**		0.68
統御指数	**	**	**	**	**	**	**	

\*\* p < .01 \* p < .05

スピアマン順位相関 (0:0 ~ 5:11)

	I Q	総合	身辺	移動	作業	意志	集団	統御
I Q		0.71	0.43	0.57	0.56	0.64	0.42	0.44
総合指数	**		0.68	0.73	0.72	0.72	0.63	0.75
身辺指数	**	**		0.51	0.53	0.53	0.32	0.40
移動指数	**	**	**		0.68	0.40	0.28	0.39
作業指数	**	**	**	**		0.43	0.26	0.46
意志指数	**	**	**	**	**		0.37	0.51
集団指数	**	**	**	*	*	**		0.44
統御指数	**	**	**	**	**	**	**	

\*\* p < .01 \* p < .05

スピアマン順位相関 (6:0 ~ 11:11)

	I Q	総合	身辺	移動	作業	意志	集団	統御
I Q		0.73	0.61	0.66	0.69	0.72	0.68	0.48
総合指数	**		0.86	0.85	0.82	0.83	0.90	0.82
身辺指数	**	**		0.76	0.71	0.67	0.73	0.67
移動指数	**	**	**		0.67	0.66	0.76	0.62
作業指数	**	**	**	**		0.64	0.71	0.60
意志指数	**	**	**	**	**		0.76	0.61
集団指数	**	**	**	**	**	**		0.70
統御指数	**	**	**	**	**	**	**	

\*\* p < .01 \* p < .05

スピアマン順位相関 (12:0 ~)

	I Q	総合	身辺	移動	作業	意志	集団	統御
I Q		0.66	0.58	0.60	0.69	0.55	0.59	0.49
総合指数	**		0.86	0.83	0.85	0.88	0.90	0.86
身辺指数	**	**		0.74	0.76	0.68	0.71	0.72
移動指数	**	**	**		0.71	0.67	0.73	0.68
作業指数	**	**	**	**		0.69	0.73	0.65
意志指数	**	**	**	**	**		0.81	0.74
集団指数	**	**	**	**	**	**		0.75
統御指数	**	**	**	**	**	**	**	

\*\* p < .01 \* p < .05

### 〈考察〉

本稿で取り扱うサンプル数は、先に述べたように京都市をのぞく京都府内に在住する知的障害児の約1/4に該当するので、知的障害児について考察するには十分なデータ数である。

表5に見られるように、IQとの相関は、いずれのSQ領域においても、また生活年齢による4区分いずれの場合もかなり高い（総合SQの場合では、相関係数は0.66～0.73の範囲にあり、危険率1%未満で相関が認められた）。各領域のSQとの相関は、自己統御SQでやや低くはなるが、それでもすべての場合で危険率1%未満で相関ありという結果を得た。この結果は、知的障害とされる子どもにおいては、どの年齢の時期においても、「知的能力」と「(さまざまな領域の)適応行動(社会生活能力)」の両者に対して有意に制約が与えられており、また制約の程度は、「知的能力領域」と「適応行動領域(下位領域を含めて)」の間で相関することを示している。このことから、能力障害としての知的障害を評価するに際して、「目安表」に含まれる各尺度は、全体的には「知的能力評価尺度」と同様に、知的障害による制約の程度を評価できることを示している。以上により、「目安表」の使用が、11版の「適応行動に明らかな制約があることを証明しなければならない」という定義に、全体的にはかなうものと考えられる。このことは、表4におけるサンプル全体区分のIQと総合SQの平均値と標準偏差の値がかなり近似している点にも現れていると思われる。

#### d 個々の子どもにおけるIQとSQの差の有無と、差の分布に関する検討

個々の子どもにおけるIQとSQの差の程度を調べるために、MAとSAとの相対比を示すパラメータ(以下、「成就指数」と称する)を

導入し、ばらつきの実態について分析した。成就指数の計算式は下の囲みのとおりである。

$$\text{成就指数} = (\text{SA}) \div (\text{MA}) \times 100$$

全ケースの社会生活能力全体と6領域毎の成就指数の計算結果は、表6のとおりであった。また、IQとSQのばらつきの状況を視覚的に把握するために、社会生活能力全体と6領域毎の成就指数の分布をヒストグラムで示したのが図13～図19である。

男女差を見るために、男女の社会生活能力全体の成就指数をまとめたのが表7、その分布をヒストグラムで示したのが図20～図21である。

表6 各領域毎の成就指数

	平均	S D
成就指数総合	101.9	27.7
成就指数身辺	117.3	41.2
成就指数移動	104.9	38.2
成就指数作業	112.0	38.3
成就指数意志	89.0	36.6
成就指数集団	93.7	39.8
成就指数統御	102.8	49.4

表7 成就指数の男女比較

	N	平均	S D
成就指数総合男	257	98.0	28.2
成就指数総合女	127	109.7	24.9

### 〈考察〉

考察cにおいて、全体的には知的能力と社会生活能力は相関することを述べた。しかし、cで提示した表4における4つの障害程度区分のIQと総合SQの平均値と標準偏差の値を細かく見てみると、平均値にはそれほど大きな差が見られないのに対して、標準偏差ではSQにお

ける値がかなり大きくなっている。このことは、IQ で分類された相応の能力区分内での個々のケースのSQ 値はかなり分散しており、必ずしもIQ と同等の障害程度区分にならない可能性を含むことになる。SQ 値の分散の様子は、先に掲載した図1～図12における「通過分布のばらつき」の中に含まれてくるのだろう。この傾向は、障害程度の軽重にかかわらず見られ、また6つの下位領域では、評価項目の少なさにもよるのであろうが、総合SQ 以上のケースごとのばらつきが認められることになる。IQ とSQ は、いずれも障害からの有意な制約を受けている能力指数であり、知的能力と社会生活能力は、いずれも発達によって継時変化を遂げる。しかし、両者は同様の共通内容を有する発

達領域なのか、あるいは異なった質を有する発達領域なのかについては慎重に検討する必要がある。

もし知的能力も社会生活能力も同程度の制約を受けるのであれば、各検査によって導かれる「精神年齢（発達年齢、以下MA と略す）」と「社会生活年齢（以下SA と略す）」は同一年齢でなければならない。もし両者にかかなり個別にばらつきが見られるのであるならば、SA がMA 相当に成就しない場合も存在すれば、MA 相当以上に成就する場合も存在することになる。成就指数という概念を用いて述べるならば、成就指数が100よりも高い者はMA 水準に比べてSA が高く、100よりも低い者はMA 水準に比べてSA が低いことを示している。

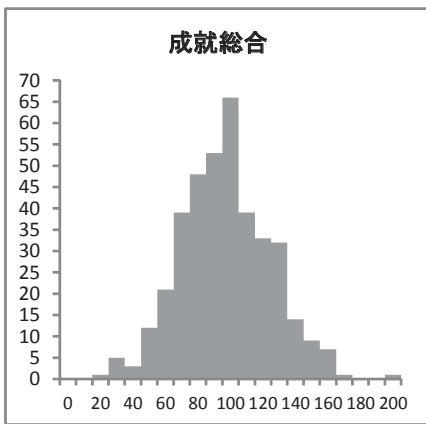


図 13 成就指数総合の分布

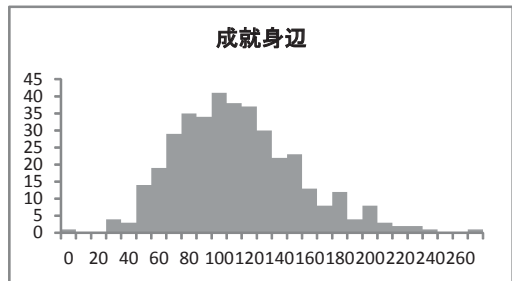


図 14 成就指数身辺自立の分布

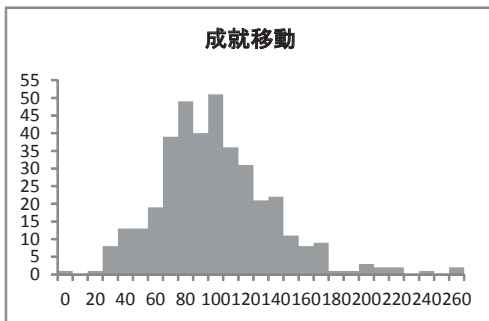


図 15 成就指数移動の分布

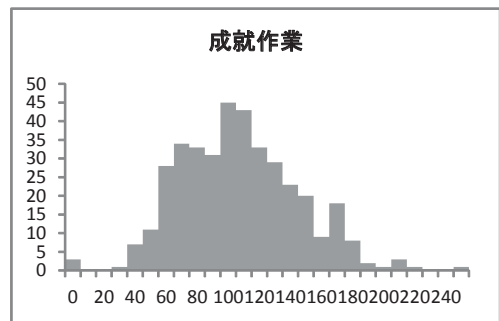


図 16 成就指数作業の分布

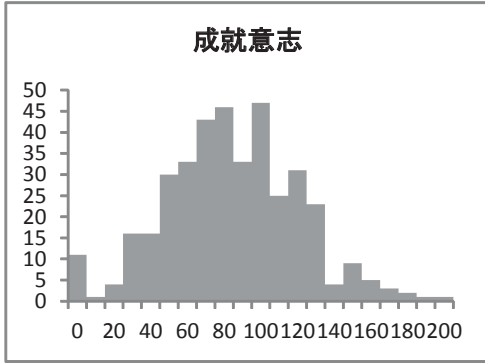


図 17 成就指数意志交換の分布

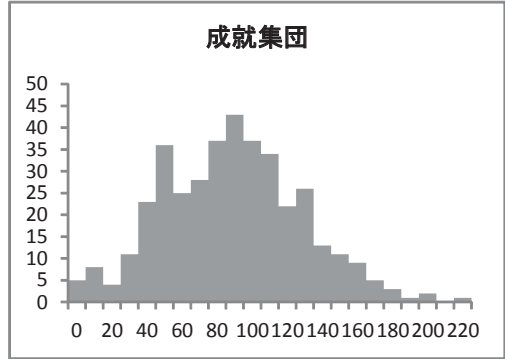


図 18 成就指数集団参加の分布

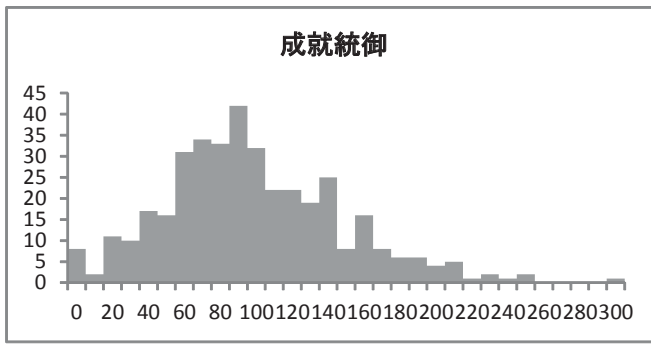


図 19 成就指数自己統御の分布

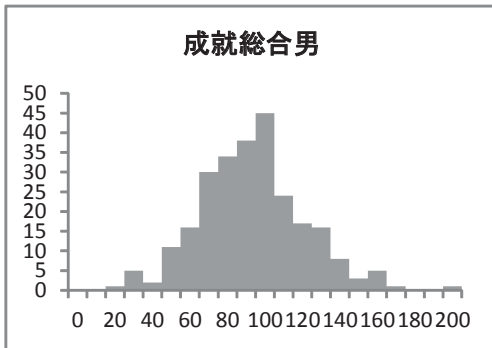


図 20 成就指数総合の分布 (男)

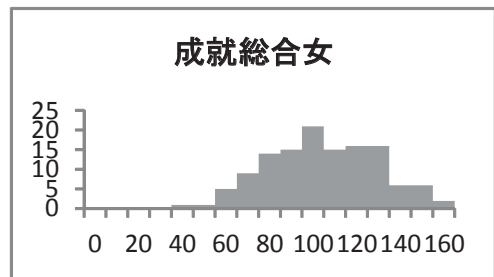


図 21 成就指数総合の分布 (女)

各領域における成就指数の平均の差異に関する考察はいずれ行いたいと考えているが、本稿では省略する。一方、各領域の成就指数における標準偏差値は予想以上にかなり大きく、個々のケースにおけるIQとSQの差異は、かなり大きなばらつきを持つことが推測される。

ヒストグラムを見てみると各図に見られるように、いずれの領域においても単なる個人差とは決して言えない程度のばらつきが正規分布に近い形で認められ、知的障害による能力の制約は、知的能力に対しても社会生活能力に対しても、ほぼ同じ程度の影響を等しく受けるとい



う推測を覆す結果となった。逆にこのような分布を示していることから、社会生活能力は、一定の知的能力においてかなりばらつきを伴って分布する、知的能力とは質の異なる評価領域であることを示唆しているものと考えられる。また6つ下位領域の分布の様子はそれぞれにかなり異なっている。本稿では深く考察しないが、6つの領域もまた、領域ごとに質の異なる生活能力

領域であることを示唆しているのであろう。

図 20 成就指数総合の分布（男）図 21 成就指数総合の分布（女）男女の結果を比較すると、表 7 に見られるように平均値において 11.7 ポイントの差が見られた。またヒストグラムを見ると、男の場合は成就指数 100 をピークとしながらも 100 未満により偏しているのに対して、女の場合は成就指数 100 をピークとしながらも

表 8 重回帰分析による IQ と社会生活能力下位領域との関連の検討

条件		全障害域													
目的変数	説明変数	全数 (N=384)			0:0 ~ 5:11 (N=70)			6:0 ~ 11:11 (N=135)			12:0 ~ (N=179)				
		R 2 乗	偏回帰係数	検定	R 2 乗	偏回帰係数	検定	R 2 乗	偏回帰係数	検定	R 2 乗	偏回帰係数	検定		
IQ・総合相関		0.69			0.71			0.73			0.66				
IQ	身辺	0.58	0.038		0.57	-0.017	≤	0.62	0.027		0.58	0.087			
	移動		0.201	**		0.262	<		*	0.208		*	0.232	**	
	作業		0.304	**		0.217	<		+	0.288		**	0.402	**	
	意志		0.281	>		**	0.427		>	**		0.405	**	0.073	>
	集団		0.136			*	0.159			+		0.084		0.097	
	統御		-0.091			+	-0.085					-0.152		+	-0.049

条件		障害程度区分														
目的変数	説明変数	最重度 (N=40)			重度 (N=56)			中度 (N=107)			軽度 (N=181)					
		R 2 乗	偏回帰係数	検定	R 2 乗	偏回帰係数	検定	R 2 乗	偏回帰係数	検定	R 2 乗	偏回帰係数	検定			
IQ・総合相関		0.69			0.47			0.28			0.17					
IQ	身辺	0.53	0.421	<	**	0.28	0.032	≤	0.13	-0.116	<	0.07	-0.064			
	移動		0.081	<			0.210	<			0.065			0.133	>	
	作業		0.056				0.078				0.229		<	+	0.202	*
	意志		0.112				0.121				-0.004			※	0.058	>
	集団		0.452		*		0.087				0.232			+	-0.063	>
	統御		-0.180				0.178	<			0.010		<	※	0.022	>

\*\* p < .01                      \* p < .05                      + p < .10                      ※ p > .90  
 不等号                      : 2 領域の指数の平均値の差が、± 5 以上あるもの (不等号は平均値の大小を示す)  
 二重不等号 : 2 領域の指数の平均値の差が、± 10 以上あるもの

100 以上により偏しているのが特徴である。男の場合には知的能力に対して社会生活能力の劣る者が多く、女の場合には知的能力に対して社会生活能力の優れる者が多いということにな

る。性差の存在はかなり明白であるが、そのことの背景に関する検討は今後の課題である。

### e 異なる質的側面を持つ評価領域と思われる、IQとSQの関連の検討

異なる質的側面を持つ評価領域と思われるIQとSQの関連性を調べるために、IQを目的変数に6つの下位領域のSQを説明変数に設定し、4つの年齢区分と4つの障害程度区分の条件で重回帰分析を行った。その結果をまとめたのが表8である。表8にはIQと総合SQとの相関係数を併記している。また、IQと各領域のSQの平均値に差のある場合には表中に不等号を付して示した。不等号の向きは平均値の大小関係を表している。

#### 〈考察〉

まずIQと総合SQとの相関を見てみると、全障害域では年齢区分を問わず、相関係数は0.66～0.73と高い相関を示す。これはすでに述べたように、知的障害という大きな枠内では、IQもSQも知的障害からの有意な制約を受けていることを示しているのであろう。換言すると、知的能力も社会生活能力も、知的障害による有意な能力制約を受ける「能力領域」であると言える。第一義的にはこのように定義できるのであるが、障害程度区分別の相関係数を見ると、最重度区分から軽度区分に向かって、0.69→0.17と段階的に減少している（統計的には、軽度区分でも両者の相関係数は5%水準で有意であるが）。障害程度を「障害による能力制限を受けながらも、能力獲得を実現できる程度」と規定し直すなら、IQもSQも第一義的には知的障害による能力制限を共に受けながらも（相関性の残存）、障害程度が軽くなるにつれて能力獲得の実現の様相（制限の様相）が、知的能力と社会生活能力の間で多面的・多義的になってくるのではなからうか。そして、能力獲得の多面性・多義性の内容は、IQとSQとでは量的にも質的にも異なっているために相関

指数が低くなるのではないかと推測される。それゆえ、知的障害のアセスメントを行う際には、質的にその方向性が異なるIQとSQを評価する必要があるものと考え。先に述べた成就指数の分布にばらつきが見られたことも、2つの能力を評価する必要性を示しているものと考え。以上をまず押さえた上で、更にIQとSQの関連を考えるために、重回帰分析の結果について考察する。まずIQとSQの相関が高い全障害域に関する分析では、「目安表」の6つの下位領域の結果がIQの結果を説明する重寄与率（R<sup>2</sup>乗）の値は、0.57～0.62と年齢区分に関係なく比較的高い値となり、6領域全部を勘案すると先に述べた総合SQとの相関に関する考察結果と合致する。しかし、6領域の関与は領域ごとにより異なる。表8の検定結果に見られるように「移動」「作業」の領域がかなり高い説明寄与を一貫して示すのに対して、「身辺自立」や「集団参加」「自己統御」はIQへの説明寄与をあまり示さない。また「自己統御」は偏回帰係数がマイナス値であるので、寄与状況そのものが不確定である。「意志交換」は少し特殊であり、12歳未満までは高い説明寄与を示すのに、12歳以降になると急に説明関与を示さなくなる。また、後に考察する平均値の差を示す不等号の方向を見ると、「意志交換SQ」はIQに比べて一貫して低評価となる。「意志交換能力」は、言語・コミュニケーション能力であり、言語・コミュニケーション能力は一般的に「知的能力」の中核能力と見なされるが、知的障害児の場合、「意志交換領域」に対する知的障害からの制限をより強く受けやすく、特に発達が進む年齢の高い子どもについてはその制限にさらに加速がかかるのかもしれない。あるいは、目安表の下位項目の発達特性によるのかのしれないが、健常児の場合はそれらの課題を含めて順次能力を獲得するのであるか

ら、相対的には知的障害からの制限の加速と考えることができる。重回帰分析結果が示すのは、IQ 結果と意志交換 SQ 結果の、能力制限の様相の差異である。以上のように、知的能力と社会生活能力は共に知的障害からの能力制限を受けるが、制限の受け方の構成は構造的にかなり異なった質を呈すると考える。

障害程度区分による分析結果では、IQ への説明寄与を示す項目が少なくなり、説明寄与が不確定となる偏重回帰係数がマイナスとなる項目が散見される。重寄与率（R<sup>2</sup>乗）の値は、最重度から軽度に向けて段階的に低くなり、軽度では0.07となる。障害が軽くなるにつれて、知的障害からくる能力獲得の制限の様子はIQ 値の高低によらず、各人ごとにかなりまちまちな様相を呈するのであろう。SQ 全体を見ればIQ との相関が示唆されるのに、重回帰分析結果に見られるように、社会生活能力を各領域に分解した所からIQ への関連を見ると説明寄与の程度が低くなるのは興味深い。

能力獲得が促進されている中度・軽度の障害領域でIQ への説明寄与が見られるのは「作業領域」である。この領域が基本的には「知的能力」の領域と質的には近いのであろう。健常児における「目安表」の標準化データにおいて6つの下位領域について検討したところ（柴田, 2013）、「作業領域」が「意志交換領域」に対して独立傾向を持たず、両者の相対的な連動が知的能力を構成する言語性知能と操作性知能の相対的な能力を生活レベルから確保されていた。健常児の場合は、その発達のバランスの中で、両方の領域が連動するように成長し、知的能力の向上と生活能力の向上に寄与したのであろう。しかし、知的障害児の場合は両者の相対的な連動が見られない。知的障害によって両者の連動が阻害されるのだろうか。またその制約は、特に「意志交換領域」に対して顕著に表れ

（意志交換領域のSQ 平均値の低さ）、また知的能力・社会生活能力が、共にそれぞれに伸びていくであろう12歳以降の時期や、全体的には能力制限が緩やかである中度・軽度の障害程度区分において、意志交換領域に対しては抑制が相対的にはより強く与えられるのである。年少の時期や障害の重い区分では、発達が未熟な段階であったり、能力抑制がより強くかかるので、「意志交換領域」へ特化される抑制は目立たないだけかもしれない。様々な発達障害が合併される臨床像に影響されているかもしれないが、そのような状態像が知的障害の本質の一面を示していると推測される。

表中の不等号が示す事柄についても言及したい。平均値の差は、各領域ごとの健常児との能力獲得の相対的な差を示しており、知的障害からの能力制限の強弱を示しているともいえる。さらに平均値に差の見られる項目がIQ への説明寄与が見られる項目であれば、制限量に差が見られても制限を受ける方向はIQ と相対的に同期して上下する項目であり、説明寄与が見られない項目は、かなりまちまちな方向で制限を受けながらも、平均値としては差がついた項目であると言える。表8の分析結果を見ると説明寄与が見られない項目が多く、特に軽度領域では6領域中の4領域がIQ 値よりも平均値が低くなる。このことは先に述べた重寄与率（R<sup>2</sup>乗）の値の低さに反映されているのであろう。

それゆえ、個々のケースの知的障害についてのアセスメントを行う場合は、「知的能力」の評価と「社会生活能力」の評価は、共に障害からの影響を受ける質的には別の発達領域に対する評価であるとの認識をもって行う必要がある。また、評価の総合所見を導く場合には、知的障害全体としての傾向を示す表8の結果を照会することが、個々の障害特性やサポートの方向を述べる際に重要となろう。

## 4 結論

以上の検討から、以下の結論を得た。

- ①「目安表」は、AAIDD が求める適応行動評価尺度の基準を概ね満たしており、知的障害児の評価に「目安表」を用いることは妥当である。
- ② 社会生活能力を獲得するプロセスは、健常児と知的障害児では異なる可能性がある。
- ③ 知的障害児において、発達に依拠する「知的能力」と「社会生活能力」は、共に知的障害による有意な制約を受けるので両者には相関関係が認められた。しかし一方で個々の子どもにおいては、両者への有意な制約の受け方は同程度ではなく、IQ 値と SQ 値を個別に比較すると、両者にはかなりのばらつきが存在する。
- ④ IQ と SQ の関連を検討することで、「知的能力」と「社会生活能力」は、発達の質の異なる能力領域ではないかと推測された。また、社会生活能力評価に用いた6つの下位領域にも質の相違が推測され、質の違いは、「意志交換領域」で特に認められた。
- ⑤ 本研究の結果をふまえ、更にばらつきの内容を分析検討することで、知的障害における多様な臨床像や、知的障害の本質解明に関する考察を展開することができる。
- ⑥ 以上の結論から、知的障害を評価する際には、社会生活能力を評価することが重要であると考えられる。

## 5 おわりに

障害概念を規定し、個々の障害状況を評価する際に、IQ とは異なる質を有し、しかし障害からの能力制限を受ける基本領域であり、きわ

めて多様な内容がアセスメントできる「社会生活能力」の評価の重要性を述べてきた。このことは、障害評価のための基本指標である ICF (国際生活機能分類) を尊重する現代の潮流とも合致する。

しかし、AAIDD の定義で「適応行動」の評価に関して繰り返して述べられているにもかかわらず、適応行動概念の曖昧さが解決しないうまま残り、また具体的な評価尺度がほとんど存在しないのが現状である。

また最近の潮流として、様々な発達障害に対する研究やアプローチの隆盛がある。このことは、それらの障害像を呈する方々にとっては大いなる発展であり、社会内での認識の深化は社会における障害理解の発展になっていることは大いに社会の益するところである。しかし、従来から存在する「知的障害」全般にとっては、むしろその陰となって、かえって曖昧なまま放置されてしまうことが多くなってはいないだろうか。知的障害全体が、全体を俯瞰されないうまま現下の発達障害モデルに取って変えられるのではないかということを危惧する。

本研究は、適応行動概念の曖昧さについて振り返り、適応行動評価の重要性を検討し、現場に有用な信頼できる評価尺度を提供できることをめざして着手した。更に、様々な発達障害を含む知的障害の臨床像や知的障害の本質について、少しでも質的解明ができないかというねらいをも込めて着手した。

本調査の結果分析のうち、知的障害の臨床像や障害像についての考察は本稿では扱っておらず、これらについては本調査結果に基づく考察を次の論文にまとめる予定である。

最後に、本調査に共同で取り組み、資料提供等の甚大なご助力をいただいた京都府家庭支援総合センター・京都府宇治児童相談所・京都府福知山児童相談所の皆様に深く感謝しま



す。本研究の成果を、まずはご助力いただいた臨床現場に還元したいと考えています。

## 引用文献

- ・ American Association on Mental Retardation. (1992). *Mental retardation : definition, classification, and systems of supports.* - 9th ed. 茂木俊彦訳. (1998). 知的障害定義、分類および支援体系. 学苑社.
- ・ American Association on Intellectual and Developmental Disabilities. (2010). *Intellectual Disabilities : Definition, Classification, and Systems of Supports.* - 11th ed. 太田俊己他訳. (2012). 知的障害定義、分類および支援体系. 日本発達障害福祉連盟.
- ・ American Psychiatric Association. (2000). *Quick Reference to the Diagnostic Criteria from DSM-IV -TR.* 高橋三郎・大野裕・染矢俊幸訳. (2003). *DSM-IV -TR 精神疾患の分類と診断の手引き.* 医学書院.
- ・ American Psychiatric Association. (2013). *Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders Fifth edition.* American Psychiatric Publishing.
- ・ 名越斉子. (2011). 社会適応スキルの評定に関する研究：保護者と担任の比較＜小林久男教授退職記念特集＞. 埼玉大学紀要. 教育学部. 別冊 1 60 (1), (pp.35-46). 埼玉大学教育学部.
- ・ 大塚敬節他編. (1982). 近世漢方医学書集成 65 香川修庵 (一) (pp.451-453). 名著出版.
- ・ 柴田長生 (全国知的障害者更生相談所長協議会療育手帳判定基準ガイドライン検討委員会). (2004). 療育手帳判定基準ガイドライン (案). 全国知的障害者更生相談所長協議会.
- ・ 柴田長生. (2004). 知的障害と発達診断. 発達 99 号 (pp.44-51). ミネルヴァ書房.
- ・ 柴田長生 (全国知的障害者更生相談所長協議会療育手帳判定基準ガイドライン検討委員会). (2005). 療育手帳判定基準ガイドライン (案). 全国知的障害者更生相談所長協議会.
- ・ 柴田長生. (2006). 子どもの社会生活能力評価について～標準化された評価尺度の試作と、知的障害児への評価から見えてきたこと～. 発達 106 号 (pp.74-88). ミネルヴァ書房.
- ・ 柴田長生. (2013). 子どもの社会生活能力評価に関する検討～「社会生活能力目安表」の信頼性・妥当性に関する追加検討～. 京都文教大学臨床心理学部研究報告第 5 号 (pp.3-23). 京都文教大学.
- ・ 清水貞夫. (2009). 知的障害はいかに理解され概念化されてきたか～ AAMR / AAIDD での議論を踏まえて～. 障害者問題研究 Vol.37 No.2, (pp.82-92). 全国障害者問題研究会
- ・ 鈴木昶. (2013). 日本医家列伝. (pp.94-95). 大修館書店
- ・ 特殊教育事典編集委員会編. (1968). 特殊教育事典. 第一法規出版.
- ・ World Health Organization. (1980). *International Classification of Impairments, Disabilities and Handicaps.* 厚生省大臣官房統計情報部編訳. (1985). WHO 国際障害分類試案・仮訳. 厚生統計協会.
- ・ World Health Organization. (1993). *The ICD-10 Classification of Mental and Behavioural Disorders*  
Diagnostic criteria for research. 中根允文・岡崎祐士・藤原妙子・中根秀之・針間博彦訳. (2008). ICD-10 精神および行動の障害 DCR 研究用診断基準新訂版. 医学書院.
- ・ World Health Organization. (2001). *International Classification of Functioning, Disability and Health.* 障害者福祉研究会訳. (2002). 国際生活機能分類. 中央法規出版.



*Abstract*

# A Study on the Evaluation of Social Abilities in Intellectual Disabled Children 1

— Meaning and Validity —

Chosei SHIBATA

AAIDD(American Association on Intellectual and developmental Disabilities) published 11th definition of Intellectual Disability in 2010. The definition about adaptive behavior and its assessment includes following points.

1. Intellectual disability is characterized by significant limitations both in intellectual functioning and in adaptive behavior.
2. Adaptive behavior is the collection of conceptual, social, and practical skills in everyday life.
3. Significant limitations(two standard deviations below) in adaptive behavior using standardized measures.
4. Standard error of measurement must be considered.

The author developed an assessment scale about social abilities of children (application age :1:0 - 10:11). This scale has six areas ; Self independence, Movement, Operation, Communication, Group participation and Self control(Shibata, 2006 : 2013).

We used this scale for the diagnosis of intellectual disabled children in Kyoto prefectural Child Guidance Center. And in 2012, we researched the diagnostic results of 447 Intellectual disabled children in Kyoto prefectural Child Guidance Center. Purposes of This research were examinations about correspondence between AAIDD's definition and our diagnosis, about social abilities of intellectual disabled children on this assessment scale, about meaning and validity of our assessment method, and about difference between intellectual functioning and social abilities(adaptive behavior).

Conclusions of this study are as follows;

1. Author's assessment method was fitted the definition of AAIDD about the areas of social abilities, standardization, and standard error.
2. acquisition process of social abilities was different between normal children and

intellectual disabled children.

3. In intellectual disabled children, social abilities were correlative to intellectual functioning on the whole. But in individual datas, each person's level of social abilities was defferent from the level of intellectual functioning severally.
4. Intellectual disability was characterized by significant limitations both in intellectual functioning and in adaptive behavior. But significant limitations in intellectual functioning were defferent from significant limitations in social abilities. Then intellectual functioning and social abilities were defferent developmental domains.
5. In six areas of social abilities scale, significant limitations from Intellectual disability were diverse.

Key words : intellectual disabled children, social abilities, definition and evaluation of intellectual disability